



[令和 3 年 3 月 10 日 定例会発表要旨 1]

私の住む地域の歴史を掘る

手稲郷土史研究会 会員 濱 埜 静 子

私の住まいは「手稲区前田 1 条 8 丁目（+街区符号・住居番号）」にあります
が、昭和 55 年にここへ転居してきたときは「西区手稲前田（+土地地番）」、
昭和 57 年には「西区手稲前田 1 条 8 丁目（+街区符号・住居番号）」、平成元
年の分区によって現在の表示になりました。この土地は、もとは「明治乳業」
が所有し、昭和 49 年に土地整理組合が組織されて 宅地となったところです。



稲積記念会館（前田 5 条 5 丁目）の敷地に「札幌市ていね稲積土地区画整理
事業」が完了したことを記念する『郷栄乃碑』が建っています。碑文を読むと、都市近郊型農業地域
として発展してきたこの一帯で 酪農家や稲作農家が土地を手放すことになった要因は、付近に工場
が増え、地下水を使うことにより水不足となり、農家が経営困難に陥ったことが窺えます。碑には
また、著しく人口が増加していた札幌市ではドーナツ化現象が起きて 郊外に住宅を求める人が増
え、昭和 45 年、市はこの地域を市街化区域に編入したということも刻まれています。新たな住宅地
は、このように誕生していきました。下の写真は、昭和 55 年当時の分譲チラシに載っていたもので
す。キャッチコピーに「やがて豊かな街が…大きな夢を託して生まれます。」の文字が躍ります。

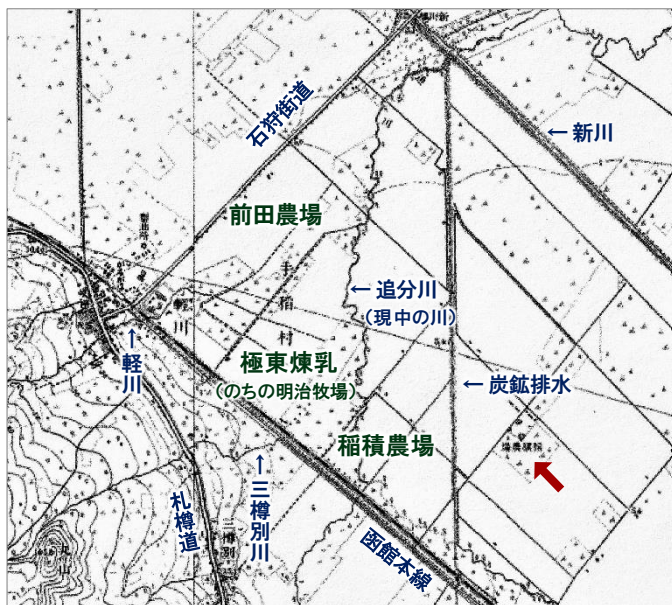
「明治牧場」の前身は、大正 7 年に「札幌興農園」の土地を買収して経営に乗り出した「極東煉乳」
でした。昭和 15 年、「極東煉乳」は「明治乳業」に吸収されて、農場も「明治牧場」と改称されまし
た。ところが、昭和 38 年 1 月（消防記録は 36 年？）、火災のため牛舎が全焼し、飼育牛は焼死し
て牧場は消滅。その後は「明治乳業」が牧草地として管理することになります。

この土地の周辺には、加賀藩ゆかりの「前田農場」と民間人による「稲積農場」がありました。明
治・大正時代の「前田農場」と「稲積農場」のあいだには「興農園軽川牧草壓搾所」があったとか、
汽車の窓から現在の稲積公園の場所に「明治乳業」の立看板が見えたという話も聞きました。それぞ
れの農場の線引きはどこにあったのでしょうか。資料にあたってみました。なかなか難しい…。



第 2 期分譲が開始された「手稲パークタウン」を紹介する空中写真 一和大ハウス工業株式会社／昭和 55 年 3 月発行のチラシより複写一

「稲積農場」は ご親族の話によると、明治35年、小樽の商人 稲積豊次郎が、軽川・中の川（古い流路か？）・三樽別川に囲まれたところに開いたといいますが、大正時代の地図では 現在の新発寒地区に「稲積農場」が記されています（地図中の矢印）。炭鉱排水（現在は旧中の川と呼ばれる）よりも東は、旧琴似町になります。飛び地があったのかもしれませんが、かなりの広さだったと考えられます。農場の名は、公園、駅、会館、学校、集合住宅などでもお馴染みです。「前田農場」の東端は現在の前田の9丁目と8丁目を隔てる通りでしょうか。つまり、前田くみあい町内会側が「前田農場」で、手稲パークタウン町内会側が「明治牧場」だった…？ 私の住んでいるところは



大正時代の石狩街道以東の農場の位置関係（推定）
—大正5年の地形図（大日本帝国陸地測量部／国土地理院）にゴシック文字を加筆—

「明治牧場」の跡地に違いないのですが、「稲積農場」との境界は 残念ながら確定できませんでした。ちなみにに界隈には、稲積明治南公園、稲積明治北公園、明治乳業宅配センターがあります。

狭い範囲とはいえ、自分たちが住んでいる土地には歴史があり、それを知ることも大切だと思います。手稲パークタウン町内会の発足時は100世帯、令和2年度には764世帯となっています。農場だった場所が、今や大きな住宅街です。これからどのように変わっていくのでしょうか。



【令和3年3月10日 定例会発表要旨2】

画家 富樫正雄と手稲

手稲郷土史研究会 会員（副会長） 乙 黒 通 子



画家 富樫正雄^{とがしまさお}は、昭和34年から手稲富丘に住み、札幌、なかでも手稲の自然を数多く描きました。カラー写真がそれほど普及していない時代にあって、美しい絵の具で表現された かつての手稲の風景は、たいへん貴重なものと思われれます。画家のご長男の耕^{こう}さんと 私たち夫婦は 手稲中央小学校の同級生でした。当時の思い出とともに、作品を紹介したいと思います。

大正2年に小樽の海産問屋に生まれた富樫正雄は、幼少期から絵の才能を発揮し、中学2年のときには道展に出品して入選を果たしています。昭和7年、東京美術学校（現東京芸大）に進学。二年間在籍しますが 生徒課の官僚気質と合わず退学し、小樽へ戻ります。昭和16年、新文部省美術展覧会（現日展）入選。戦後は日本美術会の創立に参加して“民主的文化運動”に関わり、無審査・無賞・自由出品を原則とするアンデパンダン展に出品。北海道生活派美術集団の同人となり、その頃は労働者を題材にした作品も多数残しています。昭和34年に小樽から手稲へ移住。自宅近辺の植物、手稲山麓、石狩原野、北大構内などの四季の風景を好んで描くようになりました。昭和53年、胃潰瘍で胃を切除。昭和57年に画集『四季』を出版。平成2年7月、77歳で逝去。その後、回顧展などが各地で開催されました。



三樽別川の上流で制作に励む富樫正雄
—昭和60年5月頃撮影『富樫正雄作品集』より—

芸術家というと 気難しい印象を抱きがちですが、“同級生の耕ちゃんのお父さん” は、子どもたちにはとても優しい“おじさん” でした。手品を見せてくれたり、カッコウの鳴きまねを聞かせてくれたり、怖いお話をしてくれたり、スケッチするところをのぞかせてくれたり、思い出がたくさんあります。家の中では いつもクラシック音楽が流れていて、とくにビヴァルディがお気に入りだったと聞きました。

「本物を見る、知る」ことを大切にされていたようで、ソ連がスポーツニク1号を打ち上げたときには、夜中に家族を起して空を見上げたというエピソードもあります。耕さんが 札幌のヴァイオリニストとして活躍された素地は、こういう環境にあったのかもしれませんが。

画家 富樫正雄は、自然の懷に飛び込み、その生命力に触発されながら描き続けたのでしょ。遺された文章からも人柄が偲べられます。

『富樫正雄作品集 1913-1999』（平成5年・共同文化社 発行）より、少しですが 抜粋します。

——「我が家は手稲山の裾野、土地は大きな石ばかり、平野部はタンポポさえ咲かない湿地帯か 牧草ばかりの泥炭地です。でも 冬が過ぎ 春が訪れると、福寿草、水ばしょうなどが顔を出し、私の体ひとつではとても足りないほど制作に忙しくなります。そして、手稲の冬が私は一番好きです。」「水の流れを描きたくて 20 年以上もうずうずしていたのですが、わが家から徒歩 15 分のところで良い清流を発見。サントルベツ川というのです。名前も素晴らしいでしょう。その川岸で制作中、1 メートル以上もある蛇が足元のすぐ近くまで寄ってきたのです。自然の息吹を全身に感じ、素晴らしさを通り越して 鬼気さえ覚え、夢中で絵筆を運んだものです。一瞬 音の消えた世界でした。」「旅をしても風景を描けない不器用な私、自分の住んでいるところしか描けないのです。ニレの巨木の夏の葉の茂みは精力的で美しい。描くたびに困って解らなくなってしまいます。あの膨大な茂みの群れを どう省略してどういう風に統一して表現してよいものやらと 解らないなりに描き続けて来ています。なんとか答えを出そうと 一生懸命描くだけです。初めから解っていたら 絵など描く必要がないわけだと変な理屈をこねたりしています。」——

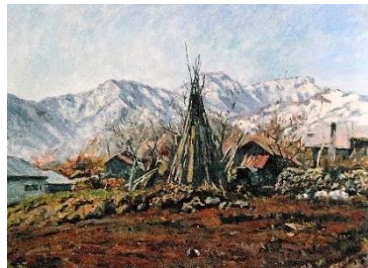
作品は、富樫正雄アトリエギャラリー（手稲区富丘2条7丁目2-13 ☎011-694-4218：見学は要相談）に収蔵・展示されているほか、市立小樽美術館や手稲コミュニティセンターなどでも所蔵しています。皆さんも機会をみて、ぜひ実物に接してください。

今回の発表にあたり、富樫耕さんから多くの資料をご提供いただきました。また、手稲郷土史研究会 会員の若松幹男さんには 北大構内・水ばしょう・コスモスが描かれた3点の所蔵作品をお持ちいただき、会場に展示することができました。感謝申し上げます。



「春近い手稲山麓」

—昭和49年作『富樫正雄作品集』より—



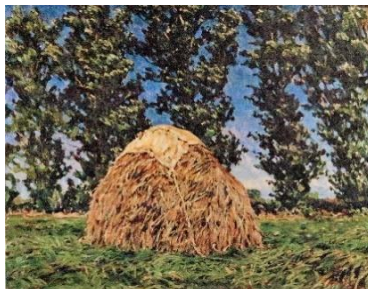
「四月の手稲山麓」

—昭和54年作『富樫正雄作品集』より—



「水ばしょう」

—作年不詳／若松幹男会員所蔵／定例会で展示—



「におとポプラ (真夏の手稲平野)」

—昭和50年作『富樫正雄作品集』より—



「旧手稲町役場」

—昭和59年作『富樫正雄作品集』より—
(手稲コミュニティセンター1階に常設展示)

次回定例会 ⇒ 発表内容「17世紀 イシカリ大酋長ハウカセと手稲」／沖田紘昭（手稲郷土史研究会 会員）

5月12日（水）18：15～／手稲区民センター3階 視聴覚室／当研究会の会員でない方の聴講は申し込みが必要です

◆ なつかし写真帖

1960（昭和35）年頃の富丘界隈

現在の富丘2条5丁目から見た風景です。1960（昭和35）年頃、新築なった我が家（旧住所＝札幌郡手稲町字富丘110番地）の周辺を撮りました。

住宅がびっしり建ち並ぶ今とはまるで違い、家のまわりは畑と田圃ばかりでした。遮るものが何もないため、丸山も、札幌国道（5号線）を走る車も、さらには手稲中学校の校舎まで見えました。「二十四軒手稲通」はもちろんまだなく、その頃の「旧国道」といえば、5号線の一本下の斜め道路のことを指していました。函館本線の方面はくんだり傾斜の湿った土地で、雪解け時期には誤って水路へ足を滑らせたことも…。

春は水辺で福寿草をよく見かけました。夏は田圃にホタルがたくさん舞っていました。秋は畑で虫の聲がにぎやかでした。冬はスキーであちらこちらを滑って遊びました。60年以上も前の私の大切な思い出です。

中島千恵子（手稲郷土史研究会 会員）



丸山と札幌国道



旧国道（斜め道路）

★「手稲歴史年表」の追補版が完成 手稲郷土史研究会では、幕末から平成21年までの手稲にまつわる出来事を年表にまとめ、『史料に見る手稲今昔～手稲歴史年表』として平成22年1月に刊行しました（在庫僅少／1,200円）。平成22年以降の10年間の事象について、追補版を作るべく当研究会有志が一昨年より調査にあたり、このたび完成しました。令和3年度内の定例会において会員へ無料配付しますので、お役立てください。

★手稲郷土史研究会「定例会」の開催時刻について 令和3年5月から10月までは午後6時15分開会、11月から令和4年3月までは午後1時30分開会となります（毎月第二水曜日）。会場はいずれも手稲区民センター3階視聴覚室の予定です。

遺構・遺物は語る

羊の像

樽川通の『若松橋』のたもとに、2頭の羊の像がある。いずれも東側を見ていて何か昔を懐かしんでいるか、追想しているかのようにも見える。

手稲土功川に沿う曙地区は、終戦間際の昭和20年7月に、東京の大空襲で戦災者となった杉並区の16戸が疎開と食糧確保のため「拓北農兵隊」として入植したという歴史があるところだ。泥炭の広がる荒地に全く農業経験の無い人たちが苦闘の末、今日の曙地区を築く礎になった。羊毛を得て衣類をも自給したいという人々の願いで、羊は飼われていた。



『若松橋』のたもとに建つ「羊の像」

そのような歴史の一端を頭に浮かべて像を改めて眺めると、ここに佇む羊たちが辿ってきた道とその切なる願いというものが込み上げてくる。村元健治（手稲郷土史研究会 会員）